

方針 3 地方祭典の全県開催をめざし、日本のうたごえ祭典の長期開催計画を持つ。

〔2006年日本のうたごえ祭典 in ふくい・北陸〕

日本のうたごえ祭典

祭典は「みんなが輝くあったか祭典」を合い言葉に福井で開かれた。2つのコンサート、大音楽会、合唱発表会とオリジナルコンサートに地元（福井・石川・富山）全国からのべ13800人が参加し、祭典史上初の日本海側開催として、その規模、内容とも成功させた。3県それぞれの特色を生かした舞台構成で、創作曲を中心とした合唱のほか独唱、郷土芸能、太鼓、器楽など歓迎コンサートにふさわしく創り上げたコンサート 越の国から、半世紀を超えるうたごえの蓄積をと福井・全国のうたごえの創造的連帯と地元音楽家・団体、ゲストの演奏で創り上げたコンサート 未来を拓くハーモニー、そして、「つながり」「海は人をつなぐ母のごとし」「かがやき」をテーマに、オープニングからフィナーレまで、未来を拓く子ども達のうたごえを軸に、郷土芸能、いのちの讃歌、国際連帯、歴史の検証、憲法讃歌などがうたや踊り、器楽を通して歌いかわされた 大交流フェスタ・いのちの輝き。日本国憲法公布60周年の日の開催となった祭典は、憲法と教育基本法改悪の動きが一層激しさをます中で、平和憲法をまもり、いのちと暮らしをまもることの大切さをうたごえで大きくアピールした。

祭典成功の要因は、福井のうたごえがこの間積み上げてきた財産（宝もの）を輝かせれば夢は必ず実現することを確認し、それを地道にねばり強く実践したこと。つながりを大切にまわりへ徹底して広げたこと。ステージの歌づくりと練習の積み上げ、一人ひとりが広げ手に、それが演奏の確認になり、観客を広げ、当日の演奏に実らせたことなどがあげられるが、何よりも、実行委員はもちろん、サークル・合唱団一人ひとりが、祭典をつくる主人公として創り上げたことだ。

何よりの財産は祭典総括にある「私達は祭典を受け入れる時に自分達の主体的力量なり地域の特性にこだわり躊躇したが、今祭典を終え振り返るとき、ささやかでも運動の積み上げた歴史とそれを土台に未来を見据えて夢を語りあう仲間がいれば、日本のどの地域でも開催が可能であること。07年奈良祭典、引き続き創立60周年に向けた各県の運動の一助になれば幸いである」に示されている。

〔地方・産業別祭典〕

地方祭典

毎年持ち回りで開催している北海道祭典（岩見沢）九州祭典（鹿児島）は、共に開催地の長を生かし、ブロックの連帯を強め、講習会の開催や全国祭典の取り組みなどにも大きな力となっている。北海道では炭坑や国鉄労働者の生き様を今につなぎ、幼稚園児も一緒に歌う「生活が見える祭典」として北海道のうたごえの広がりを感じさせた。九州は池辺晋一郎氏を招いての「悪魔の飽食」全曲演奏を柱に、活発な創作運動の成果も反映して九州全県の連帯で成功させた。久しぶりの県祭典となった宮城のうたごえフェス

ティバル、愛知のうたごえ祭典、奈良のうたごえ祭典（全国祭典プレ企画）は協議会の総力を挙げた取り組みと、ゲストや、ともに歌う合唱団の組織などで外に向かってひろがった取り組みとなっている。広島では05年日本のうたごえ祭典後に一気に増えたうたごえやうたごえ喫茶も一堂に会し、これまでの「音楽フェスタ（合唱交流会）」を「祭典」として開催、新たな広がりを見せている。長野（信濃のうたごえ祭典）、山形では毎年開催している。

産業別祭典

保育祭典は、民営化に反対するたたかいを、一人でも多くの人に伝えたいと園をあげての参加もあり、開催地東京のうたごえの協力の中で、父母、労組との共同も広げ、のべ1500人を越える参加者で大きく成功した。開催地東京東部の保育サークルが連帯し、2年間にわたり準備、保育合研などともリンクし、出演者だけでも300人を越える取り組みはおおいに学びたい。

教育基本法改悪の動きが強まる中、教育祭典は新潟・妙高で開催。教育のうたごえサークルはない中で、開催地のうたごえサークルだけのこを先頭に新潟のうたごえの協力で成功。青年・学生、障害者も共につくる未来に希望のもてる祭典となった。

国鉄祭典は福島・郡山で開催。国鉄郡山うたごえ会を中心に、県協議会の全面協力、国鉄OBなども巻き込んだ取り組みは地元だけで800人を越える参加者を組織。電通祭典は、電通のうたごえサークルのない岡山で県祭典とジョイントで開催、県協議会と創作も一緒に取り組むなどしてたたかいの理解が深まり、これを契機に岡山男性労働者合唱団が生まれている。郵便祭典は広島の青年労働者の参加が何よりの収穫、全国祭典へ送り出すカンパも取り組まれた。医療祭典は、患者会や、健康友の会サークルにも裾野を広げている。港湾、私鉄も参加サークルが少なくなる中でも継続して開催している。自治体は自治労連大阪との共同で開催。

全国青年のうたごえ祭典～f（フォルテ）大きいうたえ～が、3日間のべ500人以上を集めて行われた。これまでの全国交流会の蓄積を元に、初めて「祭典」として開催。楽しみ、学び、表現することを大切に取り組んだ祭典は、多くの大人（ゲスト、講師、スタッフ…ほとんどボランティア）の協力で、うたごえ以外の分野、団体の青年とも共同した取り組みとして成功した。

うたごえ祭典は、今伝えたいことを、誰に向かって、誰と共につくるのかを明確にしながら取り組むことが大切である。県の協議会と産業別のうたごえの共同のとりくみは、双方に貴重な財産を残している。仲間内の交流にとどまらない、「祭典」だからこそできる広がり創造の前進が求められる。